

茂木諫訪東遺跡

市道 00-360 号線（大胡 110 号線）道路築造に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2022.3

前橋市教育委員会

はじめに

前橋市は、関東平野の北西部に位置し、名山赤城山を背に利根川や広瀬川が市街地を貫流する、四季折々の風情に溢れる県都です。市域は豊かな自然環境に恵まれ、2万年前から人々が生活を始めました。そのため市内のいたる所から、人々の息吹を感じられる遺跡や史跡、多くの歴史遺産が存在します。

古代において前橋台地には、広大に分布する穀倉地帯を控え、前橋天神山古墳などの初期古墳をはじめ、王山古墳・天川二子山古墳といった首長墓が連綿と築かれ、上毛野国の中心地として栄えました。また、続く律令時代になってからは總社・元總社地区に山王庵寺、国府、国分僧寺、国分尼寺など上野國の中核をなす施設が次々に造されました。

中世になると、戦国武将の長尾氏、上杉氏、武田氏、北条氏が鎧をけずった地として知られ、近世においては、譜代大名の酒井氏、松平氏が居城した関東七名城の一つに数えられる履橋城が築かれました。

やがて近代になると、生糸の一大生産地であり、横浜港から前橋シルクの名前で遠く海外に輸出され日本の発展の一翼を担いました。

今回、報告書を上梓する茂木諒訪東遺跡は、縄文時代から平安時代に至る集落が確認された天神風呂遺跡の南方に位置しており、市道の築造に伴って発掘調査を実施しました。今回の調査は約 50 m² の狭い範囲でしたが、竪穴建物跡 2 軒が検出され、古くから人々が生活した状況を伺うことができました。残念ながら、現状のままでの保存が無理なため、記録保存という形になりましたが、地域の歴史・前橋の歴史を解明する上で、貴重な資料を得ることができました。

最後になりましたが、この調査事業を円滑に進められたのは、関係機関や各方面のご配慮の結果といえます。ここに心より感謝申し上げます。また、本報告書が斯学の発展に少しでも寄与できれば幸いに存じます。

令和4年3月

前橋市教育委員会
教育長 吉川 真由美

例　　言

1 本報告書は、市道 00-360 号線（大胡 110 号線）道路築造に伴う「茂木諏訪東遺跡」の埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2 発掘調査は前橋市教育委員会が実施した。

3 発掘調査の要項は次のとおりである。

　遺跡名称　　茂木諏訪東遺跡

　遺跡コード　　3112

　遺跡所在地　　群馬県前橋市茂木町 535-6 ほか

　調査面積　　52 m²

　調査担当者　　神宮 聰・並木史一・寺内勝彦（文化財保護課埋蔵文化財係）

　発掘調査期間　　令和 3 年 11 月 24 日～12 月 1 日

　整理・報告書作成期間　　令和 3 年 12 月 2 日～令和 4 年 3 月 25 日

4 本書の原稿執筆・編集は神宮・寺内が行った。

5 遺構図の作成は井上測量設計㈱が行った。

6 本書に使用した出土遺物の実測は、阿久澤陽子が行った。

7 発掘調査で出土した遺物は、前橋市教育委員会（文化財保護課）で保管されている。

凡　　例

1 遺跡、全体図における X・Y 値は、平面直角座標 IX 系（世界測地系）の座標値。挿図中の北は座標北である。

2 本報告書で用いる座標値は、全て世界測地系測地成果 2011 である。

3 挿図に国土地理院発行の 1 : 200,000 地形図（宇都宮、長野）、1 : 10,000 前橋市現形図を使用した。

4 遺構略称は以下のとおりである。

【竪穴建物】：H　　【柱穴】：P

5 遺構・遺物の実測図の縮尺は、各図に明示している。

6 計測値については、（　）は現存値、〔　〕は復元値を表す。

7 セクション注記の記号は縦り・粘性の順で示し、それぞれ以下のように表現する。

◎非常に縦り・粘性あり ○縦り・粘性あり △縦り・粘性ややあり ×縦り・粘性なし

8 セクション注記の含有物量は、多量（30～50%）・中量（15～25%）・少量（5～10%）・微量（1～3%）と標記した。

9 セクション注記と遺物観察表の色調については『新版 標準土色帖』（農林水産技術会議事務局 財團法人日本色彩研究所監修 2006）に掲った。

10 遺構平面図の ----- は推定線を表す。

目 次

はじめに

例言・凡例

目次

第Ⅰ章 調査に至る経緯	1
第Ⅱ章 遺跡の立地と周辺の遺跡	2
第Ⅲ章 調査方針と経過	4
第Ⅳ章 遺構と遺物	5
第Ⅴ章 まとめ	8

写真図版

抄 錄

奥 付

挿図目次

Fig.1 遺跡位置図	1
Fig.2 周辺遺跡位置図	3
Fig.3 遺跡全体図	5
Fig.4 H-1号竪穴建物跡・出土遺物	6
Fig.5 H-2号竪穴建物跡・出土遺物	7

表目次

Tab.1 柱穴計測表	6
Tab.2 土器観察表	8
Tab.3 石製品観察表	8

第Ⅰ章 調査に至る経緯

1 調査に至る経緯

市道 00・360 号線（大胡 110 号線）道路築造にあたり、令和 3 年 5 月 25 日付けで前橋市長 山本 龍（東部建設事務所）（以下「前橋市」という。）より埋蔵文化財確認調査依頼が提出された。これを受け、前橋市教育委員会（以下「市教委」という。）で同年 6 月 7 日に確認調査を実施した結果、堅穴建物跡が検出された。工事計画から遺構の現状保存は困難であると判断したため、記録保存を目的とした発掘調査実施に向けて協議を進めた。令和 3 年 6 月 14 日付けで前橋市より、埋蔵文化財発掘調査・整理業務に係る依頼が市教委に提出された。これを受けて、市教委直営により発掘調査を実施することで合意し、同年 11 月 24 日から発掘調査を開始した。なお、遺跡名称「茂木諏訪東遺跡」（遺跡コード：3H12）の「茂木」は町名を採用し、「諏訪東」は旧小字名を採用したものである。

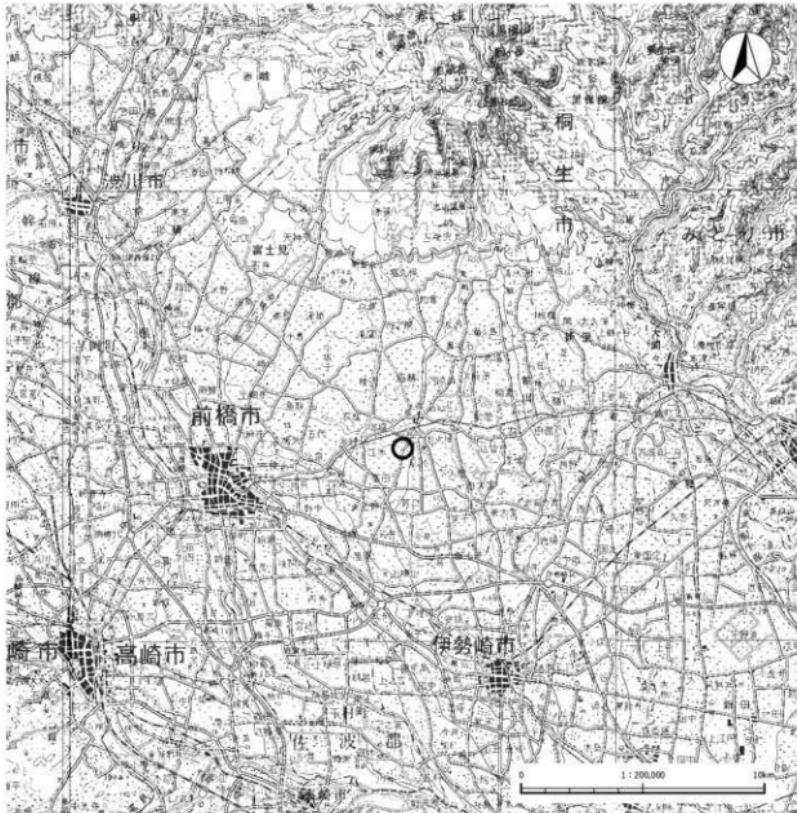


Fig. 1 遺跡位置図

第Ⅱ章 遺跡の立地と周辺の遺跡

1 遺跡の立地

前橋市の大胡地区は、前橋市街から北東約9kmの赤城山南麓に位置する。当地区を南流する中小の河川は、南北に長い台地地形と谷地形を作りだし、台地上は畠地、低地部は水田として利用されてきた。調査地点は上毛電鉄大胡駅の南方約1kmにあり、標高136.5m前後の台地上に位置する。東西ともに台地との比高差6~7m程の低地が広がり、帯状の水田地帯が続いている。現在、遺跡が立地する周辺の台地上は主に畠地として利用されているが、遺跡地北方では大胡バイパス沿線を中心に商業地化・宅地化が進んでいる。

2 周辺の遺跡

本遺跡周辺では、主要地方道藤岡大胡線や前橋大間々桐生線（大胡バイパス）、両線を結ぶバイパス道路である市道00-360号線（大胡110号線）の道路改良工事等に伴い発掘調査が実施され、旧石器時代から中世・近世までの遺跡が確認されている。

旧石器時代の遺跡である三ツ屋遺跡（2）は、相沢忠洋が発掘調査した遺跡として有名である。

縄文時代の遺跡は、前期の黒浜・有尾式期が天神風呂遺跡群（7~21）、諸磯式期が中川原遺跡群（4~6）、上大屋・越地区遺跡群（41）、中期の勝坂・阿玉台式期が茂木天神遺跡（22~27）、加曾利E式期が茂木山神II遺跡（3）、西小路遺跡（35）、上ノ山遺跡（36）、天神風呂遺跡群に見られる。後期になると堀之内II式の注口土器や三十稻場式を出土した茂木天神遺跡がある。

古墳時代になると、5世紀後半から上ノ山遺跡等で竪穴式石室をもつ古墳が構築され始める。古墳時代後期を中心とする茂木古墳群（38）は大規模な古墳群で、西小路遺跡、上ノ山遺跡の調査が行われている。上野三碑の一つ、山上碑にある「大兒臣」との関係が論じられてきた堀越古墳（29）は、終末期の円墳で、主体部には切石切組式の高度な横穴式石室を構築している。集落遺跡は、5~7世紀の前橋東商業高等学校遺跡（42）、下宮闕遺跡（43）、稻荷窟遺跡（33~34）、天神風呂遺跡群がある。

奈良・平安時代の拠点的集落として天神風呂遺跡群があり、5~11世紀に至る長期間の存続が見られる。特筆すべきは、天神風呂遺跡（大胡バイパス）（7）等から瓦塔片が複数確認されていること、天神風呂F地点（11）から復元可能な淨瓶が出土していることで、当遺跡周辺に古代官衙又は寺院遺構の存在が推定される。また、茂木山神II遺跡からは「大兒万財□」と墨書きされた土器片が出土している。「大兒」は「大兒臣」の氏姓名を示し、「万財□」は万の財を獲得したいと願望する語と解釈することができる。上大屋・越地区遺跡群の八ヶ峰生産址遺構からは、8世紀前半代の須恵器窯跡と9世紀代の製鉄跡・炭窯が出土している。

中世の遺跡としては、昭和32年に群馬大学史学研究室により調査された鎌倉時代末期の墓地、茂木古墓（37）がある。茂木山ノ前遺跡（39）では、15~16世紀前半に埋設された2万5千枚ほどの備蓄錢の出土があり、館跡が想定される。



Fig. 2 周辺遺跡位置図

1. 茂木源訪東遺跡
2. 三ツ屋遺跡
3. 茂木山神II遺跡
4. ~ 6. 中川原遺跡群 (4. 小林遺跡 5. 山神遺跡 6. 大畠遺跡)
7. ~ 21. 天神風呂遺跡群 (7. 天神風呂遺跡 (大胡バイパス) 8. 天神風呂第2地点遺跡 9. 天神風呂A地点遺跡 10. 天神風呂D地点遺跡 11. 天神風呂E地点遺跡 12. 天神風呂F地点遺跡 13. 天神風呂G地点遺跡 14. 天神風呂H地点遺跡 15. 天神風呂I地点遺跡 16. 天神風呂J地点遺跡 17. 天神風呂K地点遺跡 18. 天神風呂L地点遺跡 19. 茂木源訪東B地点遺跡 20. 天神風呂M地点遺跡 21. 天神風呂N地点遺跡)
22. ~ 27. 茂木天神遺跡 (22. 茂木天神A遺跡 23. 茂木天神B遺跡 24. 茂木天神C遺跡 25. 茂木天神D遺跡 26. 茂木天神E遺跡 27. 茂木天神F遺跡)
28. 柳沢遺跡
29. 堀越古墳
30. 茂木大道下遺跡
31. 足軽グランフ遺跡
32. 大日遺跡
33. ~ 34. 稲荷窪遺跡 (33. 稲荷窪遺跡A地点遺跡 34. 稲荷窪遺跡B地点遺跡)
35. 西小路遺跡
36. 上ノ山遺跡
37. 茂木古墓
38. 茂木古墳群
39. 茂木山ノ前遺跡
40. 中宮関遺跡
41. 上大屋・越後地区遺跡群
42. 前橋東商業高等学校遺跡
43. 下宮関遺跡
44. 谷津遺跡

第III章 調査方針と経過

1 調査方針

本遺跡地は市道 00-360 号線（大胡 110 号線）の道路拡幅部にあたるため、非常に狭い調査区（52 m²）となった。市道 00-360 号線（大胡 110 号線）は、主要地方道藤岡大胡線と前橋大間々桐生線（大胡バイパス）のバイパス道路であり、生活道路として交通量が多いことから、調査中は安全柵を設置し保安灯を点灯した。また、調査地は近年まで住宅が建っていた場所であるため、建物基礎等による攪乱の影響が想定された。

遺構調査は、表土（碎石・造成土）を重機により除去し、ローム面を確認面とした。遺構確認は人力で行い、古代の竪穴建物跡を確認した。遺構の掘り下げは、ジョレン・スコップ・移植ごて等を使用し、半裁やベルトを使用しながら作業を進めた。

測量業務は、測量業者に委託して行った。測量に用いた座標は世界測地系で、X=45,116 Y=-61,112 を起点として南東に展開する 4 m のグリッドを設定した。遺構の図化は、トータルステーションと電子平板を使用し、平面図を 1/100 又は 1/20 縮尺、断面図を 1/20 又は 1/10 縮尺で作成した。遺構写真撮影は、デジタルカメラを使用し、調査の進捗に合わせて隨時実施した。発掘調査終了後、調査成果の整理作業、報告書作成を行った。

2 調査経過

発掘調査は令和 3 年 11 月 24 日から 12 月 1 日にかけて実施した。調査は道路築造工事の着工に合わせて実施することとなっていたため、市教委文化財保護課の直営による調査となった。

〈11月 24日〉

調査範囲・廃土置場などを設定し、重機による掘削を行う。竪穴建物跡 2 軒を検出し、遺構掘削を開始した。

H-1 号竪穴建物跡：竪を残して掘り下げを進める。床面直上から滑石製紡錘車出土。

H-2 号竪穴建物跡：セクションベルトを設定し掘り下げを進める。

〈11月 25日〉

H-1 号竪穴建物跡：床面まで掘り下げ完了。竪を半裁。

H-2 号竪穴建物跡：セクションベルト残して床面まで掘り下げ完了。完形の土師器壺出土。

遺構の平・断面測量を実施。

〈11月 26日〉

H-1 号竪穴建物跡：竪完掘。

H-2 号竪穴建物跡：セクションベルトを外し、精査を行う。

〈12月 1日〉

H-1 号竪穴建物跡：柱穴 2 基を検出し、完掘後精査。

遺構の全景写真撮影後、平・断面測量を実施。発掘調査終了。

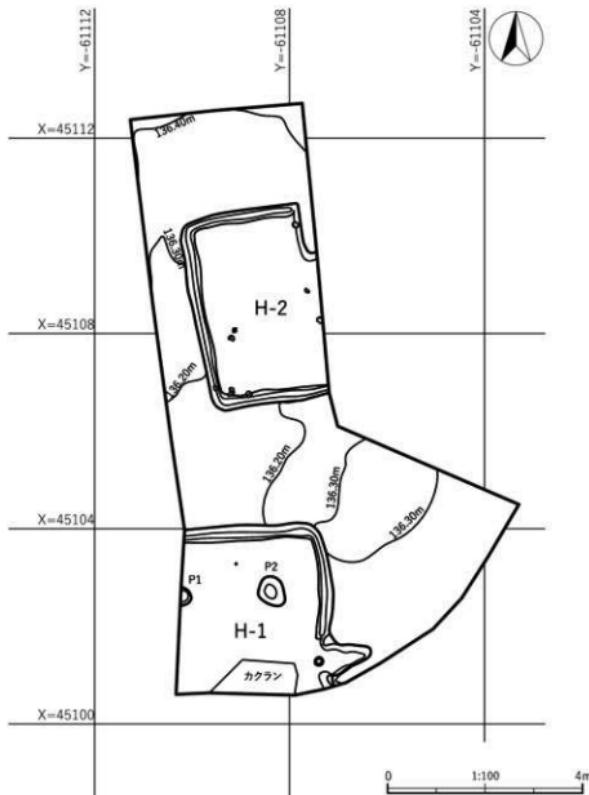


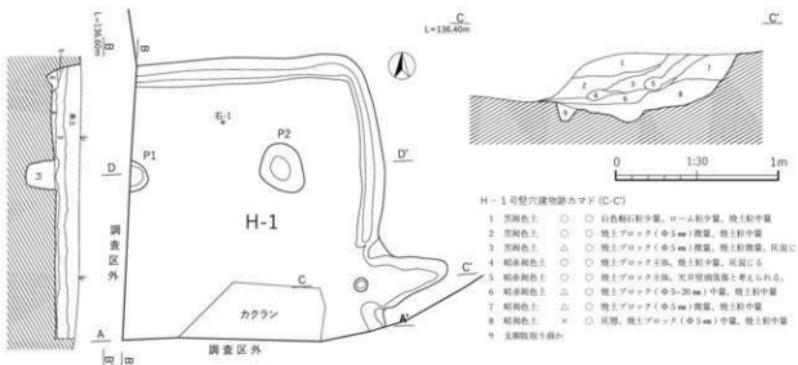
Fig. 3 遺跡全体図

第IV章 遺構と遺物

(1) 穫穴建物跡

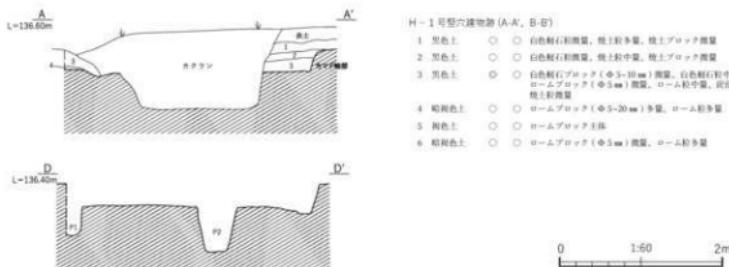
H-1号竪穴建物跡（遺構：Fig. 4、PL. 1／遺物：Fig. 4、PL. 3）

位置：X45101～45105、Y61106～61111 主軸方位：N-88°-E 形状・規模等：南・西部が調査区外であるが、隅丸方形を呈すると推定される。東西(3.52)m、南北(3.30)m、壁現高25cmを測る。面積：(10.9)m² 床面：ほぼ平坦で堅緻な貼床 窟：東壁に位置する。全長104cm、最大幅112cm、焚口部幅42cm。黒褐色粘土により構築。焚口部中央にピット状の窪みあり（支脚据え付け痕か）。貯蔵穴：不明 柱穴：2か所確認（P1、P2） 壁周溝：調査部分で全周し、幅25cm前後、深さ8cm程度である。重複：なし 出土遺物：土師器155点、須恵器1点、石製品2点、計158点出土。そのうち土師器壺1点、土師器壺1点、石製紡錘車1点を図示。時期：覆土や出土遺物から7世紀後半から8世紀前半と考えられる。



H-1号豎穴建物跡カマド (C-C')

- 1 黒褐色土 ○ 白色解石利多量。ローム少量。発土粒中量
- 2 黒褐色土 ○ 地上ブロック(Φ5mm)微量。地土粒小量
- 3 黒褐色土 △ 地上ブロック(Φ5mm)微量。地土粒微量。灰面に沿う
- 4 喀斯特地土 ○ 地上ブロック(Φ5-20mm)微量。地土粒少量。灰面に沿う
- 5 喀斯特地土 ○ 地上ブロック(Φ5mm)微量。地土粒少量。灰面に沿う
- 6 喀斯特地土 △ ○ 地上ブロック(Φ5-20mm)小量。地土粒中量
- 7 喀斯特地土 ○ 地上ブロック(Φ5mm)微量。地土粒中量
- 8 喀斯特地土 × ○ 灰層。地上ブロック(Φ5mm)微量。地土粒中量
- 9 支脚鉄取手跡



H-1号豎穴建物跡 (A-A', B-B')

- 1 黒色土 ○ 白色解石利多量。地土粒多量。地上ブロック微量
- 2 黒色土 ○ ○ 白色解石利微量。地土粒中量。地上ブロック微量
- 3 黒色土 ○ ○ 白色解石ブロック(Φ5-10mm)微量。白色解石利中量。ロームブロック(Φ5mm)微量。ローム粒少量。灰面に沿う
- 4 喀斯特地土 ○ ○ ロームブロック(Φ5-20mm)微量。地土粒多量
- 5 喀斯特地土 ○ ○ ロームブロック(Φ5mm)微量
- 6 喀斯特地土 ○ ○ ロームブロック(Φ5mm)微量。ローム粒多量

Tab. 1 柱穴計測表 (単位: cm)

No.	形状	長軸	短軸	深さ
P1	円形	39.0	(22.0)	35.0
P2	梢円形	65.0	52.0	55.0

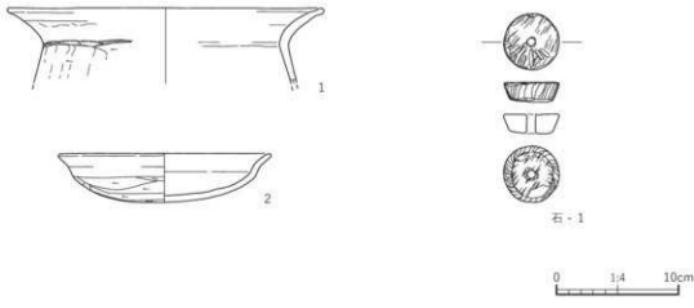


Fig. 4 H-1号豎穴建物跡・出土遺物

H-2号竪穴建物跡（遺構：Fig 5、PL. 2／遺物：Fig 5、PL. 3）

位置:X45106～45111、Y61108～61111 主軸方位：N-78°-E 形状・規模等：南東部が調査区外になるが、張り出し住居の可能性がある。東西(2.70)m、南北4.06m、壁現高28cmを測る。面積：(10.0)m² 床面：ほぼ平坦で堅緻な貼床 窓：不明。東壁に位置すると推定される。貯藏穴：不明 柱穴：不明 壁周溝：東壁を除き検出され、幅25cm前後、深さ5cm程度である。重複：なし 出土遺物：土師器153点、須恵器3点、礎石12点、計168点出土。そのうち土師器壺1点、土師器壺6点を図示。時期：覆土や出土遺物から7世紀後半から8世紀前半と考えられる。

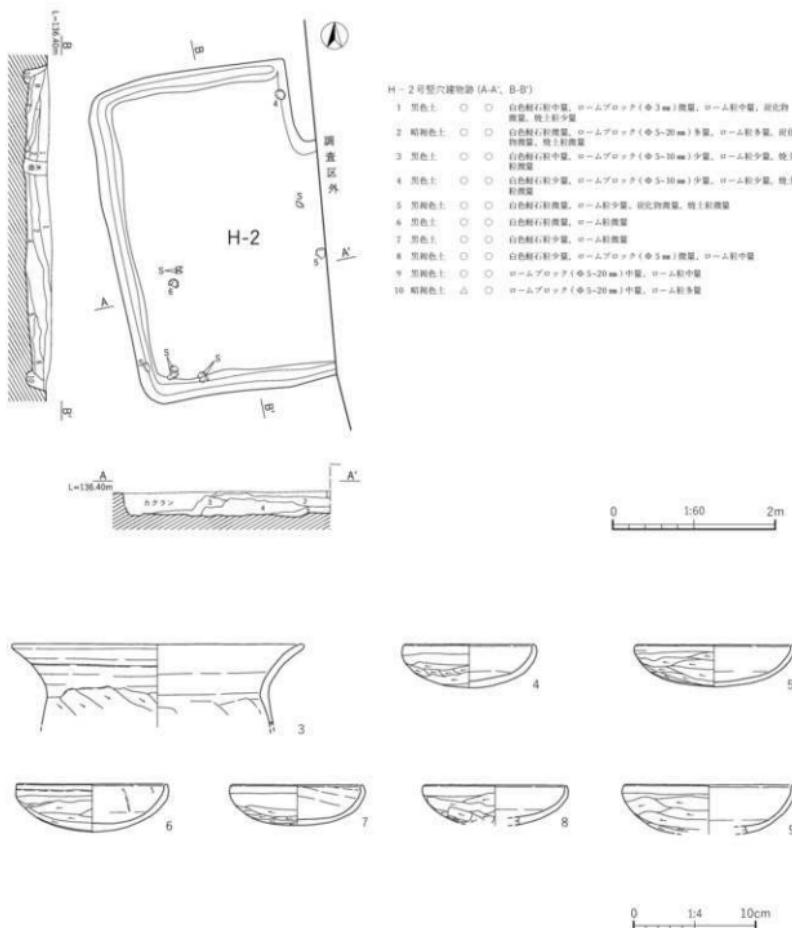


Fig. 5 H-2号竪穴建物跡・出土遺物

Tab.2 土器観察表

No.	遺物名 層位 種類	①口径 ②底高 ③底径	④軸高 ⑤底幅 ⑥底厚	⑦輪郭 ⑧底成 ⑨色調 ⑩残存	断面の特徴・整形・調整技術	登録番号	備考
1	H-1 土師器 壺	① [26.0] ② (6.2) ③ -	④細粒 ⑤普通 ⑥口～頸部片	⑦普通 ⑧普通 ⑨外面：口縁部横ナギ。胴部上位側面へラ削り 内面：口縁部横ナギ	-	-	-
2	H-1 土師器 壺	① [17.5] ② 4.0 ③ -	④細粒 ⑤普通 ⑥口～頸部片	⑦普通 ⑧良好 ⑨外面：口縁部横ナギ。体～底部へラ削り 内面：口縁部横ナギ、底部ナギ	-	-	底部凹状。口縁外反
3	H-2 土師器 壺	① [24.0] ② (6.8) ③ -	④細粒 ⑤良好 ⑥口～頸部片	⑦良好 ⑧良好 ⑨外面：口縁部横ナギ。胴部上位側面へラ削り 内面：口縁部横ナギ	-	-	-
4	H-2 土師器 壺	① [10.5] ② 3.6 ③ -	④細粒 ⑤普通 ⑥口～直立	⑦良好 ⑧良好 ⑨外面：口縁部横ナギ。体～底部へラ削り 内面：口縁～体部横ナギ、底部ナギ	1	丸底。口縁部短く内傾	-
5	H-2 土師器 床直	① [12.8] ② 3.4 ③ -	④細粒 ⑤普通 ⑥口～直立	⑦普通 ⑧良好 ⑨外面：口縁部横ナギ。体～底部へラ削り 内面：口縁～体部横ナギ、底部ナギ	2	丸底。口縁部短く内傾	-
6	H-2 土師器 床直	① [12.4] ② 3.9 ③ -	④細粒 ⑤普通 ⑥口～直立	⑦良好 ⑧良好 ⑨外面：口縁部横ナギ。体～底部へラ削り 内面：口縁～体部横ナギ、底部ナギ	3	丸底。口縁部短く直立	-
7	H-2 土師器 壺	① [10.8] ② 3.3 ③ -	④細粒 ⑤良好 ⑥口～直立	⑦良好 ⑧良好 ⑨外面：口縁部横ナギ。体～底部へラ削り 内面：口縁～体部横ナギ、底部ナギ	-	丸底。口縁部短く内傾	-
8	H-2 土師器 壺	① [11.7] ② (3.3) ③ -	④細粒 ⑤普通 ⑥口～直立	⑦良好 ⑧良好 ⑨外面：口縁部横ナギ。体～底部へラ削り 内面：口縁～体部横ナギ、底部ナギ	-	丸底。口縁部短く直立	-
9	H-2 土師器 壺	① [13.8] ② (4.0) ③ -	④細粒 ⑤普通 ⑥口～直立	⑦良好 ⑧良好 ⑨外面：口縁部横ナギ。体～底部へラ削り 内面：口縁～体部横ナギ、底部ナギ	-	丸底。口縁部短く内傾	-

①口径・②底高・③底径の単位はcmである。現存値を()、復元値を[]で示した。

Tab. 3 石製品観察表

No.	出土位置 層位	種類	計測値(cm)・特徴	登録番号	備考
I	H-1 石製品 床直	上径：4.6 下径：3.7 厚さ：1.6 孔径：0.7 重さ：55.5g 石材：滑石	-	1	-

第V章　まとめ

今回の調査は道路拡幅に伴う非常に狭い範囲の調査であったため、検出された遺構はすべて調査区外に広がり完全な形での検出とはならなかったが、出土遺物から7世紀後半～8世紀前半頃の所産と考えられる2軒の竪穴建物跡を確認することができた。そのうち、特微的な遺構としては、北側に張り出しを持つ可能性が考えられるH-2号竪穴建物跡が挙げられる。H-2号竪穴建物跡は当初2軒の重複を想定して掘り下げを進めたが、建物の平面形や床面、壁周溝の巡る状況から重複の状況は確認されなかった。建物の平面形はL字状を呈すものと推定され、東西2.70m（東側は調査区外）、南北4.06m（うち張り出し部1.20m）を測る。床面は中央部が非常に堅緻な貼床となっており、壁周溝が張り出し部東壁を除き確認された。竪について、東側の調査区外に存するものと推測され、遺物は土師器壺・壺のほか南西隅を中心に編石が12点出土している。周辺の赤城南麓地域で確認されている張り出しをもつ建物跡としては、「勝沢田之口遺跡」（H-26、40号住居）や「横沢向山B地点遺跡」（1号住居）等がある。また、最近の調査では、令和2年度に「上細井中西部遺跡群」（C工区1区22号住居跡）でも平面形状がL字状を呈する建物跡が検出されているが、その用途については不明な点が多い。今回検出されたH-2号竪穴建物跡も張り出しを持つという点を除けば、周辺の発掘調査で検出されている該期の建物跡と変わらないものとなっており、今後の周辺調査による資料の増加に期待したい。

なお、本遺跡の南側近接地では、平成11年から12年にかけて「茂木山神II遺跡」の発掘調査が実施され、7世紀後半をピークとして6世紀後半から9世紀後半まで継続する集落が確認されており、今回検出された2軒の竪穴建物跡もこの集落の一部を構成するものと考えられる。

参考文献

- 大胡町教育委員会 2001『横沢向山B地点遺跡』
 大胡町教育委員会 2001『茂木山神II遺跡』
 前橋市立歴史文化財発掘調査団 2008『勝沢田之口遺跡』



調査区全景（東から）



H-1号竪穴建物跡全景（西から）



H-1号竪穴建物跡カマド全景（西から）



H-1号竪穴建物跡遺物出土状況（東から）



H-2号竪穴建物跡全景（西から）



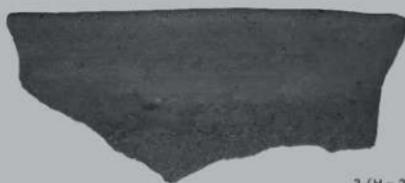
H-2号竪穴建物跡遺物出土状況（西から）



H-2号竪穴建物跡遺物出土状況（南から）



1 (H - 1)



3 (H - 2)



2 (H - 1)



4 (H - 2)



5 (H - 2)



6 (H - 2)



7 (H - 2)



8 (H - 2)



9 (H - 2)



石 - 1 (H - 1)

抄 錄

フ リ ガ ナ	モトギスワヒガシイセキ
書 名	茂木諫訪東遺跡
副 書 名	市道 00-360 号線（大胡 110 号線）道路築造に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻 次	
シ リ 一 ズ 名	
編 著 者 名	神宮 啓・寺内勝彦
編 集 機 間	前橋市教育委員会事務局文化財保護課
編 集 機 間 所 在 地	〒 371-0018 群馬県前橋市総社町三丁目 11 番地 4
発 行 年 月 日	2022 年 3 月 25 日

フリガナ 所取遺跡名	フリガナ 所在地	コード		位置		調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	北緯	東経			
モトギスワヒガシイセキ 茂木諫訪東遺跡	前橋市茂木町 535-6 ほか	10201	3112	36° 24'16"	139° 09'07"	2021.11.24 ～ 2021.12.01	52 m ²	道路築造

所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
茂木諫訪東遺跡	集落	古墳時代終末期	竪穴建物跡 2 軒	土師器甕・环 石製品（妨疊車）	

茂木諫訪東遺跡

市道 00-360 号線（大胡 110 号線）道路築造に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2022 年 3 月 18 日 印刷

2022 年 3 月 25 日 発行

発行・編集 前橋市教育委員会事務局 文化財保護課

前橋市総社町三丁目 11 番 4 号

